

横光利一の著作に見るGHQ／SCAPの検閲

——『旅愁』『夜の靴』『微笑』をめぐる

十重田 裕 一

一

本稿は、アメリカによる占領下の日本で、横光利一が発表した著作にどのようなメディア規制が作用していたかを考察することを目的としている。

一九四五年九月から一九四九年十一月まで占領期日本はGHQ／SCAP (General Headquarters / Supreme Commander for the Allied Powers) の検閲下にあった。この間、出版前に校正刷を当局に提出してチェックを受ける事前検閲から、出版後に刊行物を提出する事後検閲へとシステムは移行する。占領下で発表されるすべての刊行物は、GHQ／SCAPによるメディア規制を受けており、横光の場合も例外ではなかった。それでは、占領期に発表された横光の著作にGHQ／SCAP検閲のいかなる痕跡が見いだせるのだろうか。

横光は昭和前期には、「文学の神様」と称されるほど華々しく活躍していたが、敗戦後には決して多いとはいえない小説とエッセイを雑誌・新聞に発表し、一九四七年十二月に四十九歳で没している。占領下においては、新作の発表こそ多くはなかったものの、旧作に基づくと二十点をこえる著作が、生前のものに限りても刊行されている^①。疎開先の山形から上京後の、切れ目のない著書刊行による多忙ぶりについては、当時の書簡からうかがえる^②。一九四五年末の上京以降、雑誌・新聞掲載作に加え、少なくとも著書が、約二年間のあいだに発表されることになるのである。

そうした発表作が、GHQ／SCAPの検閲による修正の指示をどのように受けていたかについて、メリーランド大学図書館プランゲ文庫所蔵資料に基づく「占領期新聞・雑誌情報データベース」(<http://m20thdb.jp/login>)などを活用し、さらに、プランゲ文庫で実地調査をし、検討を行なった。雑誌・新聞など定期刊行物掲載の創作に対する検閲については、「微笑」(『人間』第三巻一号、一九

四八年一月）が編集者による自己検閲によって本文が改変されていること⁽³⁾以外には、検閲による書き換えの痕跡は現段階では確認されていない。

一方、単行本については、『旅愁』第一～四篇（改造社、一九四六年一～七月）、『夜の靴』（鎌倉文庫、一九四七年十一月）、『微笑』（斎藤書店、一九四八年三月）に、GHQ/SCAPの検閲による修正の指示があったことが、プランゲ文庫所蔵資料からうかがえる。これから論じていくように、『旅愁』と『夜の靴』については事前検閲の跡をとどめる校正刷から、『微笑』については事後検閲による指摘の書き込まれた単行本から、それぞれ明らかとなるのである。

以下では、事前・事後の検閲の痕跡が確認された『旅愁』『夜の靴』『微笑』の個々の事例に即しながら、横光利一の著作に対して行なわれた占領期のメディア規制について検討を加えたい。それにより、アメリカの占領下で横光が発表した著作に、いかにGHQ/SCAPの検閲が深く影を落としていたかが明らかとなるであろう。

二

アメリカによる占領下で発表された戦後版『旅愁』は、改造社が戦後出版事業を再開するにあたって、石坂洋次郎『若い人』、林芙美子『放浪記』とともに「改造社名作選」として最初に選ばれた企

画であった。『旅愁』『若い人』『放浪記』の三作は、改造社戦前のベストセラーであり、戦後の出版界の需要に急ぎ対応できる企画と出版社は考えていた。改造社とかかわりの深い横光にはとくに期待がかけられ、『旅愁』は戦後再発の嚆矢を飾ることになったのである。

『旅愁』『若い人』『放浪記』の三作刊行の発案とプロセスについては、担当編集者であった木佐木勝の日記に克明に記録されている。この三作のうちで、『旅愁』がGHQ/SCAPの検閲に抵触する懸念があることを、木佐木は一九四五年十一月十六日の日記に、次のように記している。

今夜からいよいよ横光利一の長編小説「旅愁」を読み出すことにした。事務所では落ち着いて読む暇もないので、家へ帰って読むことにしたのだが、今のところ私の計画として「旅愁」のほかに、林芙美子の「放浪記」、石坂洋次郎の「若い人」の復刊をやりたいたいと思っている。この三冊は戦前の改造社の大ヒット版であったし、戦後の出版界の需要に応えるものとして、さっそく間に合うものだからだ。横光氏にもそのことを手紙で交渉し、林氏や、石坂氏にもわたりをつけたいと思っているが、横光氏の「旅愁」だけは「放浪記」や「若い人」とちがって、もう一度よく読み直して見ないことには不安である。かたんに出版できるかどうかも疑問である。今ではマッカーサー司令部の検閲の眼が光っているからだ。「旅愁」が司令部の検閲の

眼を通過できるかどうか私には自信がない。

言論の自由とか、出版の自由とかいい出したのは占領軍だが、いちいち司令部の検閲を受けなければ出せないのだからやっかいなことになったものである。これでは昔の日本の内務省の役目を司令部がやるようなものだ。現在の日本は亡国状態なので、私たちはいつも司令部の意向と眼を恐れなければならない。

今夜「旅愁」を第一篇から読み返してみたが、まだ初めのようなので問題のヤマ場にくるのはまだ先きである。しかし、ちよいちよいい気になるところがある。

戦後版『旅愁』は第一篇（一九四六年一月）、第二篇（一九四六年二月）、第三篇（一九四六年六月）、第四篇（一九四六年七月）からなるが、木佐木の懸念どおり、GHQ/SCAPの検閲下での刊行であったため、本文に修正が加えられることになる。とくに第一篇については、アメリカ軍のメディア規制のもと、GHQ/SCAPの指示にしたがって、横光は小説の表現をかなり書き換えている⁽⁵⁾。GHQ/SCAPに提出した校正刷による確認はできないものの、木佐木の日記から、当局からどのような修正を要求され、いかなる対応をしたのが明らかとなる。木佐木が予想していたとおり、一九四五年十二月二十八日に第一篇の校正刷を提出し、翌年の一月五日には当局から削除箇所について正式な申し渡しりがなされ、「伏せ字は絶対に許されず、削除のあとをとどめないように訂正するよう念を押された」のである。

第二篇以降については、木佐木が本文の改変にかんしてほとんど言及していないために明確とはならないが、GHQ/SCAPの指示にしたがった修正の可能性は十分にありうる。ただし、木佐木の日記に記録がないために、『旅愁』第二篇以降の戦前版と戦後版に見られる本文の異同が、横光ならびに編集者による自己検閲、GHQ/SCAPの検閲のいずれによるものか詳らかとはならない。当局による書き込みの跡をとどめる校正刷や編集者の証言があるなどの確証がなければ、検閲による修正であるか否か判断がつかないからである。また、この三つの要素が絡み合った結果の異同である可能性も考えうることから、第二〜四篇に見られる異同についての判断は慎重にならざるをえない。

しかし、プランゲ文庫所蔵の『旅愁』第三篇のゲラの存在から、GHQ/SCAPによる修正の指示があつたことが確認でき、この部分についての考察は可能となる。この校正刷に見られる、以下の傍線の表現が黒鉛筆によって鉤括弧でくくられたうえで青鉛筆で消され、黒鉛筆で「祭政一致の構想は」の部分をつまみ、欄外に「delete」と記されている。引用の末尾に括弧の受けがないのは、校正刷の頁がえにより、会話文が途中で終わっているためである。

「城だつて茶室だつて着物だつてさうだよ。国の成立の構想に
したつて、僕は日本の大昔からつづいてゐる祭政一致の構想は、
やはり美があると思つてゐるのだ。さうさう、先日僕は、信長
時代に京都へ耶穌寺を建てたポルトガル人のフロイスといふ宣

教師が、こつそり本国へ送つた書翰集を読んでみたら、日本といふ国は大変な文明国だ、むしろ自分の本国よりも文明が高いと思ふ（つゝ）

この校正刷には、削除理由は示されていないが、傍線の内容からその理由を推測することは十分に可能となる。「日本の大昔からつづいてゐる祭政一致の構想」に「美」を見出す発想が、戦前・戦中の日本の政治体制を美化し肯定するものであり、戦後民主政策を否定する見方につながると当局に判断され、修正の指示を受けたと考えられる。

この引用箇所に対応する、刊行された『旅愁』第三篇の本文は、以下のとおりである。加筆箇所については、波線で示した。

「城だつて茶室だつて着物だつてさうだよ。もつとも、城はポルトガル人が這入つて来てから、少し前とは変つた傾きがあるが、それでも、あれだけの美しさにした所は、さうさう、先日僕は、信長時代に京都へ耶蘇寺を建てたポルトガル人のフロイスといふ宣教師が、こつそり本国へ送つた書翰集を読んでみたら、日本といふ国は大変な文明国だ、むしろ自分の本国よりも文明が高いと思ふ……」

事前検閲の時期にあたるゆえ当然のことではあるにしても、この引用からは、校正刷に見られるGHQ/SCAPの指示にしたがい、修正が加えられたことがわかる。「日本の大昔からつづいてゐる祭政一致の構想は」に関連する節を削除し、前後の文脈にあうように、

ポルトガル人渡来以降について言及しながら、「城」の「美しさ」に焦点を当てて書き換えられているのである。

この校正刷が、かつて多数存在していたものの一部であるか否かは詳らかではない。もし、この校正刷が『旅愁』第三篇にかんするもののすべてであれば、戦前版と戦後版とのあいだの本文の異同は、作家あるいは編集者による自己検閲の可能性が強いことになる。逆に、この校正刷が多数あつたものの一部であるとすれば、本文の異同は、GHQ/SCAPの検閲によるものであることが考えられる。しかし、現段階ではいずれの確認もなく、事実関係については、今後の調査に委ねざるをえない。

もとより、『旅愁』第三篇の戦前版と戦後版の本文とのあいだに、本文の異同が多数見られることから、検閲による加筆・修正の可能性は十分にありうる。とりわけ、戦前・戦中の国家・思想・宗教に関連した記述の書き換えについては、そのような可能性は少なくない。ただし、著者や編集者の証言などによる確認ができないために、『旅愁』第三篇に見られる書き換えが創作意図、検閲による指示のいずれによるものかは、容易に明らかとはならない。また、これら複数の要素が絡み合っていることもないわけではない。木佐木日記に記されていたように、GHQ/SCAPからの要求にしたがつて『旅愁』第一篇では大幅な加筆・修正が加えられており、それを内面化した横光による本文の改変がなされたことも考えられる。しかし、GHQ/SCAPの修正指示のある校正刷や作家・編集者の確

たる証言がない限り、メディア規制による本文の改変に言及するには困難がともなうことから、取り扱うにあたっては慎重である必要がある。

三

つづいて、『夜の靴』について検討をしていく。占領期に刊行された横光の著作の多くは、戦前・戦中にすでに出版されたものであったのに対し、『夜の靴』は戦後にはじめて上梓されている。『夜の靴』は、横光が山形に疎開していた一九四五年に書かれたと推定される「感想集」「夜の靴ノート」などをもとに、戦後、雑誌に発表された文章に加筆・修正が加えられて刊行となった。雑誌発表の文章は、次の四篇である。

『夏臘日記』 『思索』 第二号、一九四六年七月

『木蠟日記』 『新潮』 第四十三巻七号、一九四六年七月

『秋の日』 『新潮』 第四十三巻十二号、一九四六年十二月

『雨過日記』 『人間』 第二巻五号、一九四七年五月

雑誌掲載の「夏臘日記」「木蠟日記」「秋の日」「雨過日記」には、検閲による書き換えの指示は今のところ認められない。もとより、作家や編集者による自己検閲が行なわれていた可能性は否定できないものの、少なくとも現段階では、校正刷や調書等からは検閲による書き換えが行なわれた形跡は確認されていない。一方、鎌倉文庫

刊行の『夜の靴』については、プランゲ文庫所蔵の二つの校正刷から、具体的な検閲の指示があったことが明らかとなる。『夜の靴』の頁数にしたがって、順次その箇所を示しながら検証していきたい。まず、『夜の靴』の一四二頁に該当する一つ目の校正刷では、青鉛筆によって以下の傍線箇所が消され、「Change」の指示が欄外に書き込まれている。

国旗は命じたときでなければ出してはならぬ、道路は左側通行の厳守、十四歳以下の子に牛馬を曳かしてはならぬ、武器刀剣ことごとく提出すべし、以上、進駐軍からの命令だとの事だ。そして、組長は、

「これに違反すれば、どんとやられても仕方がないぞよ。」といふ。

「さうか、そんなら、かうはしてはをれん。」

さつそく参右衛門は立ち上り、竹筒から、竿に縛りつけたままの国旗の小さいのをとり脱した。それから床間にかかった武運長久の掛軸も脱して巻いてしまふ。

『夜の靴』のこの引用部分は、進駐軍の通達に対する一九四五年十月の村での反応が記述されている。傍線部の「どんとやられても仕方がないぞよ」は変更の命令にしたがって、「どう罰を食ふか分らんぞよ」という表現に書き換えられていることが、出版された『夜の靴』の本文との校合から明らかとなる。ここに見られるGHQ/SCAPの指示は、「進駐軍からの命令」の反応に対してなす

れたものである。その指示が「delete」ではなく「Change」であるゆえに、横光ならびに編集者が言い回しを変えることで修正指示に対応しているのがわかる。

校正刷の段階に見られる「どんなにやられても仕方がない」という表現からは、厳しい処罰が想像されかねない。しかも、ここからは、勝者のアメリカからいかなる攻撃を受けてもそれを甘受する、敗者の日本人の受け身と諦めのニュアンスがうかがえる。こうした権力的で非平和的な対応ととられかねない表現に対して、それを「どう罰を食ふか分らんぞよ」と、「罰」という具体的な語彙を使い、言い回しを和らげながら書き換えることで対応している。ここからは、法を破った「罪」に対して、当然の報いとしての「罰」が与えられることが示されるのである。

つづいて、『夜の靴』の一六四頁の該当するもう一つの校正刷には、青鉛筆によって以下の傍線の表現が消され、「delete」の指示が欄外に書き込まれている。

「二代目はピストルだが、やはり、首のところだ。」

しかし、事實は今もそれどころの騒ぎで鎮りさうもない情勢だ。まだこれは絞首にさへ発展するかどうか計り知れぬものを秘めてゐるが、久左衛門には話はそこで止めねばならぬ不便もあつた。何ぜかといふと、彼は人の云ふやうに、寺で物を売つて儲けた人だからである。どうでも良いやうなもの、それはやはり、どこことなく云ひ難いものがあつた。たつまりはそこが彼

の不幸な部分といふべきものだらう。

『夜の靴』のこの引用部分に該当する箇所には、次のように、傍線部分を削除すると同時に加筆が行なわれている。加筆箇所については、波線で示した。

「二代目はピストルだが、やはり、首のところだ。」

しかし、久左衛門には話はそこで止めねばならぬ不便もあつた。何ぜかといふと、彼は人の云ふやうに、寺で物を売つて儲けた人だからである。どうでも良いやうなもの、それはやはり、どこことなく云ひ難いものがあつた。つまりはそこが彼の不幸な部分といふべきものだらう。やはり、このやうな保守的な限りもない習慣はかりの村では、非劇の種類も自ら違つて来るのだ。そこがいつも話してゐてむつかしいところである。

この引用の直前に、「東條英機建築敷地」のことが話題となり、最初の土地所有者が首吊自殺をし、その「二代目」にあたる東條元首相の自殺未遂について言及する際に、引用のような表現になっている。この部分は、安寧秩序が乱されると同時に、東京裁判への言及に対する削除の指示と考えられる。この削除指示以前と以後の本文をくらべると、横光ならびに編集者が、傍線箇所を指示通り削除し、後者の引用にある二つの文を付け加える対応をしていたことがわかる。傍線箇所の削除理由については、「それどころの騒ぎで鎮りさうもない」と事態の大きさを示す表現であり、また、「絞首にさへ発展するかどうか計り知れぬものを秘めてゐる」と戦争犯罪の

ことが話題とされていることによる。

加筆の箇所については、実際の検閲に対応しているか否かについては明確にはならないものの、傍線の表現を削除したことで、説明不足になった点を補うための加筆ともとれる。しかし、この加筆は必ずしも具体的ではなく、曖昧な表現になっているように見える。また、校正刷の段階ゆえ、前掲引用にあるように、「どこことなく云ひ難いものがあつた」と、句点の位置の誤りを修正するものもあり、検閲による指示とは直接にはかかわりがなく、内容上の加筆が行なわれた可能性もありうるのである。

四

最後に、『微笑』（斉藤書店、一九四八年三月）について検討を加える。この著作は、横光の没後に刊行されており、戦前発表された旧作と戦後発表の「微笑」によって構成され、下記の六篇が収録されている。

- 「微笑」 「人間」第三卷一号 一九四八年一月
- 「終点の上で」 「中央公論」第五十六卷一号 一九四一年一月
- 「厨房日記」 「改造」第十九卷一号 一九三七年一月
- 「罌粟の中」 「改造」第二十六卷二号 一九四四年二月
- 「担ぎ屋の心理」 「大調和」第一卷五号 一九二七年八月
- 「皮膚」 「改造」第九卷十一号 一九二七年十一月

これら六作を収録した『微笑』には、事後検閲の痕跡が認められる。本の表紙に「4/8/8」と一九四八年四月八日に当局によってチェックされた日付が記され、「Post Censored」という、検閲官による事後検閲が行なわれたことを示す記述がある。また扉には「[violation P.126]と記されており、書物のなかの「違反」と見なされる一箇所にも、「不許可」との判断が下されたことがわかってくる。

事後検閲の対象となったのは、欧州から帰国した作家が、旅行先での経験を踏まえながら、日本の知性を西洋と比較しながら思索する小説「厨房日記」である。「厨房日記」でチェックをされた箇所は、主人公である作家の「梶」が通訳を介してフランスのダダイズムの詩人、トリスタント・ツアラに話している、次の一節である。下記の傍線部が青鉛筆で囲まれ、「disapproved」と「不許可」であるとする書き込みがある。

「……これらの知性（ヨーロッパの左翼の知性——引用者注）は日本とヨーロッパの左翼の闘争対象の相違について考へません。従つて同一の思想の活動は、ヨーロッパの左翼の闘争が生活機構の変形方法であるときに、日本の左翼は日本独特であるところの秩序といふ自然に対する闘争の形となつて現れてしまつたのです。これはどうしたつて絶対に負けるのは左翼です。つまり、それは自然に反するからなんです。ヨーロッパのはすでに自然に反したものを自然に返さうとする左翼であるのに対

して、日本の左翼は自然に反さうとする運動です。日本に近ごろ二・二六事件といふ騒動の勃発したのはよく御存知のことと思ひますが、あれは左翼の撲滅運動でもなければ、資本主義の覆滅運動でもありません。ヨーロッパの植民地の圧迫が、日本の秩序にいま一重の複雑な秩序の要求を加へただけです。」

当局が注目したのは、戦前日本で起こった二・二六事件を「ヨーロッパの植民地の圧迫が、日本の秩序にいま一重の複雑な秩序の要求を加へた」ことによるものとする見解に對してであつた。二・二六事件という軍事蜂起と欧米の植民地への言及に加えて、その二つが結びついているがゆえに、検閲官から指摘を受けるに至つたと考えられるのである。

しかし、事後検閲による指摘であつたために、すでに書物は流通しており、この検閲官による指示は少なくとも初版においては反映してはいない。ただし、再版の場合であれば修正の余地はあり、現段階では確認できていないものの、事後検閲の指摘が本文に反映している可能性はある。

『微笑』収録作で不許可の指摘を受けたのは「厨房日記」だけであるが、冒頭に配置された横光の遺作「微笑」にも注目する必要がある。「微笑」の初出雑誌掲載本文については、『人間』の編集長・木村徳三が自己検閲を行ない、小説の表現の多くを削除していったことが、彼自身の証言から明らかとなるからである⁸⁾。

「微笑」の直筆原稿と初出雑誌掲載本文を校合すると、両者に多

くの異同が見られ、雑誌掲載にあつて、大幅に削除されていることがわかる。「微笑」については、掲載誌の編集長がGHQ/SCAP検閲による修正の指示が入ると判断し、自己検閲を行なっているのである⁹⁾。

しかし、これより数ヶ月を経て、横光没後に刊行された『微笑』収録の「微笑」は、自己検閲によって修正された本文ではなく、直筆原稿に基づいている。雑誌『人間』一九四八年一月号に掲載の「微笑」についての指示が全くないことは、その内容から見て考えにくいのだが、単行本収録時には何の指摘も受けてはいなかった。「微笑」に書き換えの指示がなされなかった理由は詳らかではないものの、事後検閲に推移したことで、検閲官がすべてに目を通していなかった可能性がその一つとして想定される。

以上のように、事後検閲で指摘を受けたのは、皮肉なことに、雑誌『人間』の編集長が恐れ、初出雑誌掲載時に注意深く自己検閲による加筆・修正がなされた「微笑」についてはなかった。雑誌掲載本文については、担当編集者が少なからぬ表現を削除する自己検閲をしていたのだが、直筆原稿どおりの本文を掲載した単行本収録本文については、当局からの修正の指示はなく、戦前発表の「厨房日記」の一部表現の場合についてのみ、不適切とする指摘がなされていたのである。

五

これまでたどってきたように、横光の著作に見られた事前検閲と事後検閲の事例からは、この作家に対して行なわれた占領期GHQ／SCAPの検閲の一面が浮かび上がってくる。『旅愁』『夜の靴』については、事前の検閲で、その校正刷に記された当局の指示が反映された本文に基づく書籍が刊行され、流通していたことが明らかとなった。GHQ／SCAPによるメディア規制によって、表現の修正を余儀なくされていたのである。

一方、『微笑』については、事後検閲で修正すべき点が提出された書籍に記載されていたが、刊行後であったため、この書物はすでに流通しており、本文が書き換えられた形跡はない。そして、興味深いことに、初出掲載時に雑誌編集長が自己検閲により削除した本文は事後検閲ではまったく問題にされず、戦前発表の小説「厨房日記」の一部表現に不適切であるとの指示が書き込まれていた。

本稿で扱った『旅愁』『夜の靴』『微笑』の三つの事例からは、占領期発表の横光の著作についてもGHQ／SCAPの検閲による修正を求める指示があり、事前検閲については、それが反映された本文が流通していたことがわかってくる。これまでは、ほとんど注目されてこなかった、占領下で刊行された横光の著作の本文にも、確実にGHQ／SCAPの検閲が浸透していることが明らかになった

のである。

もとより、ここで確認された検閲が、占領期に発表の横光の著作に対して行なわれた、GHQ／SCAPによるメディア規制のすべてであるとは、現段階では断言できない。プランゲ文庫において、単行本に対して行なわれた事前検閲の校正刷の整備は現在でも継続中であり、今後新たに確認される事例が出てくる可能性があるからである。したがって、将来的には、ここで取り上げた以外にも、検閲の実施が明らかとなることは十分にありうるだろう。

ただし、GHQ／SCAPの指示のある校正刷がすべてプランゲ文庫に保管されていたか否かは定かではなく、本稿で言及した校正刷は、現存するものの一部にすぎないのかもしれない。そうであるならば、かつてはあったとしても、今は存在しない校正刷に記されていた可能性のある、検閲官の指示についても想定する必要があるのだが、それを検証することには困難がともなう。横光の同名作の戦前・戦中版と戦後版を校合することで、本文の異同を明らかにし、それがGHQ／SCAPのプレスコードに抵触しそうな内容であるか否かによって、検閲による加筆・修正箇所を推測することは可能ではあるだろう。しかし、書き換えの指示のある校正刷の存在、あるいは作家・編集者による、メディア規制にしたがった加筆・修正の痕跡がない限り、同名作の戦前・戦中版と戦後版のあいだに見られる本文の異同と、GHQ／SCAPによる検閲の相関性を立証することはできない。

この点については、横光利一のみならず、占領期に発表された著作の場合にも同様に問題となることであり、この時期の本文を取り扱う際のアポリアとなる。こうした本文の異同が、創作意図、検閲による指示いずれのものなのか、正確には判別することは難しく、他律的・自律的な書き換えが混在している可能性も考慮に入れる必要のでてくるゆえんである。

これまでの研究では、占領期日本で刊行の出版物に見られる本文の異同についての多くは、作家の創作意図という観点からとらえられてきた。しかし、この時期のすべての出版物が、アメリカ軍の占領下で発表されている以上、本文の異同にGHQ/SCAPの直接的・間接的介入を考慮に入れることが不可欠であることは、本稿における考察からも明らかとなるのである。

注

(1) 『定本 横光利一全集』第十六卷(河出書房新社、一九八七年十二月)の「書誌」からは、以下のように、占領期の一九四五〜四七年に、横光利一の著作が短期間に多数刊行されていることがわかる(ただし、戦前・戦中刊行の書物の増刷については含めていない)。

- 一九四五年――『雪解』(養徳社、十二月)
- 一九四六年――『旅愁』第一〜四篇(改造社、一、二、六、七月)
- ・『紋章』(鎌倉文庫、三月)
- ・『時計』(斎藤書店、五月)
- ・『春園』(富士書店、六月)
- ・『鶏園』(斎藤書店、八月)

- ・『罌粟の中』(新文藝社、九月)
- ・『実いまだ熱せず』(柏書院、十月)
- ・『寝園』(札幌青磁社、二月)
- ・『機械』(細川書店、二月)
- ・『横光利一選集』(斎藤書店、二月)

- 一九四七年――
- ・『菜種』(養徳社、二月)
- ・『花花』(山根書店、三月)
- ・『天使』(蒼樹社、四月)
- ・『横光利一短篇集』(創元社、七月)
- ・『紋章』(新潮社、新潮文庫、八月)
- ・『雅歌』(蒼樹社、九月)
- ・『時間』(山根書店、十月)
- ・『盛装』(美和書房、十一月)
- ・『夜の靴』(鎌倉書房、十一月)
- ・『実いまだ熱せず』(永晃社、青春文庫、十一月)
- ・『シルクハット』(地平社、手帖文庫、十二月)

(2) 中里恒子宛ての横光利一書簡(一九四六年・月日不明)に、以下のように、疎開先から上京後の旧作出版の多忙ぶり、創作意欲の喪失感が記されている。「帰つて来ましてからは、出版屋せめに会ひ、疲れてへとへとです。そこへ原稿ですが、終戦以来まだ感想一つも書きません。勿論作もです。「改造」のは去年の正月に書いて置いたもので、実際、何も言葉が泛かんで来ない有様です。『改造』掲載作は、「青葉のころ」(一九四六年一月)と思われる。

(3) 十重田裕一「引き裂かれた本文――『微笑』と事後検閲における編集者の自主規制」(『文学』第四卷五号、二〇〇三年九月、岩波書店)でこの点については論じた。

(4) 木佐木勝『木佐木日記 第四卷(昭和十九年〜昭和二十三年)』(現代史出版社、一九七五年十月)。中央公論社をへて、改造社に移籍した木佐木

が書き遺したこの日記は、大正時代から昭和時代の文学をたどるうえで貴重な基礎資料であるが、戦後の横光の動向について多くの紙幅を割いている。

(5) 十重田裕一「第二次世界大戦後版『旅愁』第一篇の検閲と表現」(中村明・野村雅昭・佐久間まゆみ・小宮千鶴子編『表現と文体』二〇〇五年三月、明治書院)でこの点については論じた。

(6) 『旅愁』第三篇の表紙に「納本」というスタンプが押され、「checked 6646」という、黒ペンによる記載などがある。刊行後、書き換えを要求した校正刷との照合の確認を示すものと思われる。

(7) 『夜の靴』の扉に「checked 12-22-47」という、黒ペンによる記載などがある。注6の場合と同様に、刊行後、書き換えを要求した校正刷との照合の確認を示すものと思われる。

(8) 木村徳三『文芸編集者 その登音』(TBSブリタニカ、一九八二年六月)。この書物は加筆・修正をしたのちに、『文芸編集者の戦中戦後』(大空社、一九九五年七月)として刊行された。

(9) 注3に同じ。

附記

メリーランド大学ゴードン・W・プランゲ文庫所蔵の貴重な資料を調査するにあたり、同文庫の坂口英子氏、エイミーワッサストロム氏、ジェンキンス加奈氏にお世話になりました。記して謝意を表したいと思います。

